
私のこの一年

安野正之 / 環境生態学科

1月にイタリアのイスプラにあるヨーロッパ連合の環境研究機構で研究方法科学者グループの会議がもたれた。前回はバイオマーカーで今回は代替方法がテーマでいずれも私の専門から遠いので、付け焼き刃的な勉強をしていってもあまり役に立たない。問題の中心は動物実験に替わる方法についてであったが、それでも生態系研究における実験系についてまとめを書かされた。本がでるのはかなり先のことになる。

6月パリで開催された既存化学物質のハザード/リスク評価の会議にでる。各国の分担作業で、ヨーロッパ各国の報告の水準が上がるのに、日本の報告は暴露のデータが無いに等しいので、リスク評価になっていない。日本代表をそろそろ交代したい。

9月エコトキシコロジー研究会で名称を環境毒性学会と変更、同時に、同学会の会長に推される。奈良における陸水学会に参加、琵琶湖に関する研究発表は常に注目的。

11月クアラルンプールで行われた国際生物科学連合の生物指標シンポジウムでアオコとミジンコの関係についてポスターで報告。

12月パリ、経済開発機構（OECD）本部でリスク評価諮問委員会と試験方法に関する国代表者会議の2つの会議に出席。後者は今回が初めてで、大量のドキュメントを読むはめになる。日本抜きで各種の試験法が決められようとしているので待ったを掛ける。

伏見碩二 / 環境生態学科

「琵琶湖元年」随想

25年間続いた琵琶湖総合開発（琵琶総）が1997年春終了し、これからはポスト「琵琶総」の時代です。それはどんな時代か？ 例えば渇水年だと、京阪神地域の水利利用のために琵琶湖からさらに放流するため、人為的な影響もくわわって、水位がかなり低下するようになるでしょう。新しい琵琶湖の歴史のはじまり。琵琶湖元年、です。

昨年暮れには、京都で地球温暖化防止会議が開かれました。地球温暖化効果ガスの削減率などが決まりましたが、開発途上国には大いに不満の会議だったようです。温暖化の主な犯人は先進国なのに、その犯人たち主導の会議だった、からです。はたせるかな、南北問題、が露呈しました。南側の国々にとってみれば「北側こそ、自分の庭をまずきれいにすべきだ」と思うのも、当然です。

琵琶湖の水利利用に関する下流の京阪神地域と上流の滋賀県の立場は「南北問題」の裏返しの感があります。ここでは、南が先進側、北が開発途上側で、地球環境問題とは逆の構図です。南のために、北の琵琶湖の水資源を徹底的に利用することを主な目的にし、水位低下などを起こしても、琵琶湖周辺の人間活動に障害がでないようにするのが「琵琶総」の主なねらいだった、のです。

ぼくにはネパールなどの南側の国での経験がこれまでにありますが、淀川・琵琶湖流域の上下流問題では北側の立場を、また地球環境問題では南側の立場を重視するとともに、人間中心主義（開発・経済優先型）から脱却し、生物・非生物がつくる全体社会を保全するという観点から、ローカルな地元の犬上川の環境保全問題をはじめ、リジョナルおよびグローバルな地球環境における南北問題などをとらえていき、さらに、それらの根本課題として、差別観の打破とも関係する“ 衡平さの実現 ” に向けての考察を深めたい、と「琵琶湖元年」にあたり考えています。

國松孝男 / 環境生態学科

4編の学術論文を須戸助手と共著で公表し、3冊の著書（いずれも共著）を出版した。ようやく後期からフィールドワークの学生が、そして12月からは卒論の仮専攻生が研究室で実験するようになり、2年越しに賑やかに研究生活が送れるようになった。

論文 林地からの汚濁負荷とその評価、水環境学会誌、20, 810-815(1997)、
琵琶湖水質の化学的特徴、環境技術、26, 480-484(1997)、
森林溪流の水質と汚濁負荷流出の特徴、琵琶湖研究所所報、14, 6-15(1997)、
ゴルフ場からのシマジンの長期流出シュミレーションモデル、環境科学会誌、10, 39-50(1997)、
著書 「水文・水資源ハンドブック」(水文・水資源学会編) pp.511-513、朝倉書店(1997)、
「土壌圏の科学」(芝田進午、喜多大編) pp.1017-1040、ソフトサイエンス社(1997)、
「持続可能な環境政策」(菅原正孝編) pp.35-46、技報堂出版(1997)。

三田村 緒佐武 / 環境生態学科

琵琶湖のほとりの湖沼環境実験施設に4月に引っ越し、日々琵琶湖を観察してきた。彼は、優しい顔、穏やかな顔、心揺れる顔、怒っている顔などさまざまな表情を見せる。その顔を眺め、私は面前に広がる研究対象を本当にありのまま解きほぐし全体像を明らかにすることが可能かと、自分の生活環への思いと重ねて見つめた1年でもあった。その心の葛藤をしずめるため、国内外のさまざまな湖沼の観察と、それを研究の場とする研究者との語らいを続けた。次年度は、琵琶湖が何を求めているのかを少しは理解できるだろうか、それともますます複雑な対話をしなければならないのか。私の琵琶湖との歩み方、生き方の指針になる。

中山 英一郎 / 環境生態学科

この大学に赴任して以来2年間、来年こそは少し労度が減り、楽になるかもと期待してきたが、3年目の本年も益々、徒に、忙しくなるばかりであった。新春早々、1月7日に東京大学海洋研究所・白鳳丸研究航海・KH-96-5次航海に参加すべく、オーストラリアのパースに旅立った。パースの外港であるフリーマントル港から出港して、20日余りのインド洋の研究航海を終えてマレーシアのペナンに着いてからの5日間は、本学のことなど全く忘れるくらい素敵な、つかの間のバカンスを楽しんだ。この地での何よりの収穫はコリアンダーを使った素晴らしい味のエスニックカレーに出会えたことである。この味を再現すべく、日本に帰ってから日曜毎に研究し、ほぼ成功を収めた。この成果は来年の我が大学の湖風祭において、タイカレーを得意とする同じ学科の村瀬君と一緒にエスニックカレー店を開いて、全学に披露するつもりである。

4年生の卒業研究を除く、全ての授業が出揃った今年は、環境分析化学（前期）環境化学（後期）自然環境学（前期オムニバス・1/4）外書講読（前・後期オムニバス・1/4）環境分析化学実験（前期）化学実験A、B（後期2日）自然環境実習（前期、一部）、フィールドワーク（前期）、フィールドワーク（後期）加えて自然環境特別実習（夏休み中4日間、和歌山県白浜にある京都大学瀬戸臨海実験

所での海洋実習)をこなした(多すぎると思いませんか?)。フィールドワーク では何故か熱心な先生方のグループに入ってしまう、何で、私がこんなことやらなければならないと疑問を感じつつ、毎週のように田圃の脇の用水路で流速やら、電導度、pHなどを計った。フィールドワーク には全く関わる気はなかったが、私のテーマを選んだ学生達の熱意にほだされ結構、真面目にやってしまった。

かくのごとく、本年も、私自身が地道に研究する暇なく終わった。唯一、研究らしきものと言えば、文部省科学研究費(基盤(A))(1) 代表者:京都大学生態学研究センター・中西正巳)に加わり、月一回、湖沼実験施設の“はっさか”などを使って琵琶湖の化学的観測を行ったことくらいである。

上野 健一 / 環境生態学科

最近是中国への出張の機会が増え、ついにマルチエントリーのビザまで取ってしまった。ここ5年の中国の変貌は凄まじい。中国銀行のお姉さんがにこにこしながら“ニイハオ”と言うのならまだしも、新華書店の定員に“探し物は何ですか”と聞かれると気味が悪い。私が最初に中国を訪れた1987年頃は税関での厳しいチェック、殺伐とした埃塗れの町と自転車の大軍、何を聞いても“無い”の一点張りだった事を思うと、過去の“共産圏”を懐かしくさえ思う。世界は本当に変わるものである。“変化”といえば、昨年のテレビ番組で生態学の故・井上先生がおっしゃっていた“これからは競争ではなく共生の時代である”という言葉が素人ながら印象に残った。ご専門の方に伺うと、適応度を尺度としたときの“相利共生と競争”の関係を述べられていたそうだが、より広い意味で言う“共生”とは物理でいう“相互作用”であり、英語で言うところの“Inter,,,,”に似ているような気がする。学問の融合や学際化など無理に叫ばなくても、実は各分野で既に同種の問題に対する取り組みが開始されているのであろう。最後に環境科学部棟の裏の駐車場に関して。同駐車場に増え続ける学生の車にどのように対処すべきか議論がなされたことがあった。チェーンロック、職員の早朝巡回からゲートの新設までさまざまな議論が行われたが、入り口にチェーンを渡し必要に応じて開閉し、鍵を各教員が管理することで事実上は解決している。大変シンプルだが安価で人間の行動原理をよくつかんだ名案であったと思う。これも一つの新しい“共生”の形態だと思いませんか? おしまい。

近 雅 博 / 環境生態学科

湿潤熱帯の食材性昆虫相と食糞・食腐肉性昆虫相について海外調査をおこない、それらについて系統分類学的研究をおこなった。1997年8月にタイ王国のマレー半島部において、京都大学およびChulalongkorn University と共同の調査をおこなった(文部省国際学術研究No.08041144)。1997年9月にボルネオ、サバ州キナバル山、クロッカー山脈およびトゥルスマディ山において、北海道大学、東京大学、North Carolina State University および University Malasia Sabah と共同の調査をおこなった(文部省国際学術研究No.08041136)。また、分子に基づく系統解析的研究のための資料を収集し、分析用の器材を整備した(文部省基盤研究C No.09839030)。

丸 尾 雅 啓 / 環境生態学科

今年度は月1回の琵琶湖定期観測に加え、6/28~7/5までフブスグル湖(モンゴル北西ロシア国境付近)の水質調査に参加した。降水量の少ない大陸内部の湖に行き、現地を見ると共に、水質測定が出来たことは幸いであった。主要成分を測るだけでも、海国日本の湖沼とは全く組成が異なり、日本の湖のまた一部分しか知らなかった私にとって大きな収穫であった(現段階では巨象の毛を一本抜いてきたような程度であるが)。このあと8/18~9/8まで東京大学白鳳丸による北太平洋(カナダから北緯45度線沿いに東京まで)研究航海に参加し、海水中の微量金属の存在状態を測るためにサンプリングを行った。よって試料が実験室にうなっており、この測定を終えることが当面の課題である。陸上では、南極氷床コア試料中のアンモニア、カルシウム連続融解分析装置の作成を検討。装置は現在極地研究所で最後の詰めに入っている。

村 瀬 潤 / 環境生態学科

水分を多く含みぬかるんだ土のことを「泥」と言いますが、「泥」にはその他にも、「つまらないもの」「かす」「嫌われもの」などの意味を含んでいます。(ちなみに「泥」を表す英語"mud"にも同じような意味があります。)そのせいか、土壌学者は研究対象としての「水田土壌」を決して「泥」とは呼びません。

滋賀県立大学に来て新たに琵琶湖堆積物の研究を手がけ始めましたが、元来水田土壌学者の端くれである私としては、その呼称がとても気になります。「堆積物」と呼ばれることは極めてまれで、研究者の間でも普通は「泥」「底泥」、新聞紙上では「汚泥」「ヘドロ」などと表現されることも珍しくなく、大変ショックを受けました。

ひいきのひきたおしではないのですが、堆積物が決してつまらないものではなく、嫌う必要もないことをいかにアピールするかを画策しつつ実習船「はっさか」に乗り込むこの1年でした。

末 石 富太郎 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

1997年も目がまわった。講義は、本務が5コマとFW / 、学年別のゼミ、他大学は環境人文学(精華大) 環境情報論(関大) 遂に関大とFW を重ねてしまった。この間、共著『暮らしとリサイクル』(朝倉書店)と主としてリスク関連の展望論文9本が出せ、あまり筆債もためず、講義以外の講演も22回(聴講者10~520/総数1945)こなした。テーマは環境・観光・健康・報道など、社会・経済システム学会/「科学・技術者の社会的責任」は賛辞を頂き、大阪産大での「平和研究」Pax-Touristicaも質疑を盛り上げたが、主催者の動員力に負うものがまだ多い。私もDMの利用者だが、Bill Totten「日本:アメリカ属国論」、Deborah McGlaulin「NPO日米比較」、京大教授法開発センター「Teaching Portfolio」は迫力満点、半日を捻出した甲斐があった。

しかし大学院の設立準備で、文部省と準備委員会の間での賽の河原の石積みには参った。IDE研究会で「新構想学部の現在」を報告した時も、文部省は護送船団方式のつもりなのだろうが、多くの関係者が「もう無駄なゲームを止めようではないか」と発言したことを書き残しておく。

奥野長晴 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

60年代はロスアンゼルスに次ぐ全米2番目に空気の汚れた町、70年代はアメリカの経済衰退により半ばゴーストタウン化した町、そして90年代にはそれが全米で最も住みたい町に変貌、このドラマの主人公がテネシー州チャタヌーガ市である。

一度衰退した町がどうすればリバイバルできるのか？ 彦根に移住して以来、この疑問が私の頭から離れなかった。それには次のようなわけがある。東京からやって来た私の目には「森と湖と古城にかこまれた当地こそ正にラ・シャングレラ」に映った。しかしそのうちに下町の荒廃が目につきはじめたのである。下町こそ彦根をどこにもない世界中で唯一の町たらしめる顔ではないか、この荒廃ぶりに心が痛む。こんなときチャタヌーガの奇跡を知ったのである。私財をはたいて早速この町に行ってみた。そこで見たものは「我が町は自分で守る」という西部開拓時代のあの自治の精神と市民の実行力であったのである。全市民の意志の統一、予算の確保、プロの応援を経て、見事に旧市街地のリバイバルに成功。電気バスを10分間隔で無料運行、スーパーなし個人商店だけ、小ぎれいなレストラン、安価な持ち家促進プログラム、6つの映画館で構成する娯楽コンビナート、ポケット公園、オフィスビル、旧劇場の蘇生、歴史的建物のリノベーションと再利用、週末の無料コンサート、テネシー川沿いの散歩道、全米最大の淡水魚水族館の誘致、年間30万人の観光客。これだけの大事業を、市民自らボランティアの下で成し遂げたという。これにはただ脱帽のみ。「下町はわれわれの文化だ、我々の歴史だ、我々の心だ、ビジネスの場所だ、興奮と楽しみの根源だ」の合言葉が市民を団結させたと聞き、私は久しぶりに感動さえ覚えた。この感動の余韻が「地方都市再活性化の処方箋の開発」を自分の研究のテーマとすることに結実していった。目下、日本国内の町作り村起こしの実例を集めている。

土屋正春 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

この一年を振り返ると、自分の仕事をまとめるという大切な面がはかどらず、時間のやりくりで苦労するばかりであった。が、そうする間に貯めたメモは大学院に通っていた頃と同じ位の量になった。しかし私の場合、メモを貯めるという作業は内容が拡散しやすいため、その整理をしているが、ルールの形成過程と市民意識の関連で2件ほどがテーマとして育ちそうな感がしている。

仁連孝昭 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

現在の関心は3つある。ひとつは、環境問題に関する社会科学的なアプローチを整理することである。これは「環境経済学」の講義をつうじてまとめようとしている。もうひとつは、人工衛星画像を使ってタイ東北部の土地利用区分をし、そこから自然データと社会経済データを統合した環境モデルをつくることである。その成果の一部は熱帯農業学会で「GISを利用した東北タイの天水田地域の土地利用評価」として報告した。最後に、琵琶湖集水域の物質循環を分析することであり、まず愛知川流域を対象にそのためのGISを構築している。

石川義紀 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

今年は大忙しだった。前期はそうでもなかったが、後期は特に忙しかった。3年経って講義が増えたこともあるが、行政とのかかわりが多かったのも原因の一つ。現実になんが要求されるのかを知るうえで行政や民間との接触を保っておかねばならないことはよくわかっているのだが、法律改正の手伝いやCOP3の協賛行事に首をつっこんだのが原因で、おかげで休講してしまった。ごめんなさい。

秋山道雄 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

夏期間中、マレーシアへでかけ、クアラルンプルを中心とした都市圏の環境問題と環境政策について調査した。マレーシアの経済発展が著しいことはすでによく知られているところだが、今回でかけてみてマレーシアの都市部はすでに車社会に入っていることを実感した。また日本でも秋になって報道されたように、インドネシア発の煙害（現地ではヘイズとよぶ）は相当なもので、このリアリティーをつかめたのも現地調査のなせるわざだろう。

井手慎司 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

「環境毒性削減：評価と制御 講習会」講師（1月）、「JICA/ILEC 湖沼水質保全研修」講師（1～3月）、「EICA 編集委員会」開催（7月、滋賀県立大学にて）、「JICA 個別研修」講師（9月、中国より）、「水文・水資源ハンドブック 水環境質変換技術とそのシステム『処理技術体系』」出版（10月）、「温暖化防止京都会議」参加（12月）、「GEMS/Water 国内会議」出席（12月）

金谷健 / 環境計画学科 環境社会計画専攻

教育：前期は新規が「合意形成技法演習」と「社会計画演習」と「社会計画演習ゼロ（非公式）」と「環境科学（和歌山高専の非常勤；集中）」の4つ、継続が「環境FW」と「資源環境科学（京都工繊大の非常勤；毎週）」の3つ、継続が「環境統計学（2コマ）」、合計4つ。授業数及び新規が多く、ハードな1年。

研究：土木学会シンポで発表（内陸埋立と海面埋立の比較；11月）環境科学会で連名者が発表（地域ゼロエミッションに向けて；10月）。もっと研究すべきだったと反省の1年。

社会貢献：講演3回、講座や講習会の講師7回。準備が大変だが、様々な方々と意見交換できて有益なこともあった1年。

林昭男 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

1997年の出来事でまず挙げたいのは、シム・ヴァンダーリン、スチュアート・コーワン著の『エコロジ

カル・デザイン」の訳書を出版できたことであり（5月）、その直後、原著者の記念講演会を東京と京都で持てたことでした（6月）。会議への参加も多かった。PLEA（釧路・1月）JIA大会（東京・9月）ニュージーランド建築家協会大会（NZ・9月）環境倫理をめぐる会議（メルボルン・10月）などあった。また、SimVanderRyn、PetoRetondo（USA）、DarkoRadovic（Australia）、EkhartHarn（Germany）、Arvind Krishan（India）、Bata Tamás（Hungary）、Dick Urban Vestbro（Sweden）などの来訪を受け、エコロジカル・デザインに関する今後の研究交流の道が開かれた。富山建築学校への5回の出講、COP3と併行し、日本建築学会主催のシンポジウム（京都・12月）のパネリストとして参加したことも記録にとどめたい。

内 井 昭 蔵 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

この一年、京都市新庁舎整備懇談会座長とし、各界の代表、有識者と共に京都のビジョンを研究してきました。本年度中に報告書をまとめることとなります。論文は、日本建築学会技術報告集に滋賀県立大学キャンパス設計におけるマスターアーキテクト方式の報告として「デザインコードの役割」を提出採用されました。

奥 貫 隆 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

97年8月短期在外研修で、ドイツミュンヘン工科大学景観生態学研究室を訪問し、ミュンヘン、フライジング、ランツフト他の都市及び河川景観調査を行う。また、ノルトライン・ヴェストファーレン州ドルトムント市ほか17都市で実施されているIBAエムシャーパーク・プロジェクト（広域環境再生計画）を視察し、資料を入手した。

97年9月滋賀県琵琶湖環境部で検討中の「淡海風景プラン」策定のための景観調査に協力し琵琶湖空撮を行った。景観計画やFW でその成果を活用している。

柴 田 いづみ / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

環境FWIII、Aグループの「まちづくりと環境情報」において、メールリンクをつくり、15名の学生と5名の教員の意見・情報交換、資料配布をしてきましたが、これは学科、専攻の混在する構成のFWのチームプレーを潤滑に進行出来て、大変たのしく有効でした。

成果は環境科学部のホームページ（HP）の中に掲載の予定です。同じHPに「環境小話」を書いています。ご覧下さい。URLは <http://www.ses.usp.ac.jp> です。

福島県で設計した矢吹駅+周辺計画が福島県建築文化賞特別部門賞をいただきました。この駅にとって鉄道建築協会賞、通産省・グッドデザイン施設賞について3つ目の賞です。

水 原 渉 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

雑多な内容の1997年

大きな作業は、大津市のフランケンハウス（ドイツ木造建築）の建設に際しての日本適合化作業であった。農村計画的な意味で良かったのは日野町の「美しいむらづくりアドバイザー」を始めたことである。その他、ドイツの地域計画の研究の少しの前進（昨夏にドイツの関連官庁に手紙で請求し、送付のあった資料を現在読みこなし中）がある。この作業は「環境保護に視点を置いた地域計画の研究」と関わるもので、ドイツのものを先進事例とし研究を進めている。このテーマは、自分が主査を務める建築学会・都市計画委員会・地域計画小委員会での基本テーマの一つにしたいと考えている。

その他、雑誌記事などとして「エコロジーと建築計画学」（『建築雑誌』1997年6月号）、「滋賀県立大学での模索」（1997年度日本建築学会大会都市計画部門パネルディスカッション「これからの都市計画教育を考える」資料）、「ドイツ式木造軸組真壁構造の移築」（『建築と社会』1998年1月号）滋賀県の土地利用計画などの評価を含む小論（共著で3月出版予定）を執筆した。

授業面では、新しい授業や内容がまだ安定していないものがあり主に教材の作成に大きく時間を割いた。

濱 田 五 郎 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

本年度の特別研究「余暇関連施設の利用形態の研究」における湖西地域の自然を活用した主要な施設を調査した。ピラデスト今津、新旭風車村、安曇川町のこどもの国（県立）、高島町ガリバー旅行村、朽木グリーンパーク、いきものふれあいの里（県立）、志賀町げんき村である。そして夏季の近江舞子やマキノサニービーチなどの水泳場や野外活動施設である。また、長野オリンピック関連施設を見学し、沖縄スボレク祭参加の時にみた伝統的住宅と名護市庁舎などの現代建築に、台風と太陽の強い影響をみた。

学外の諸事業に参画する機会があった。彦根中心市街地再生事業委員会報告書がまとまり、その具体化への機関設置が検討されている。中小企業近代化促進法による滋賀県左官工業活路開拓事業委員会報告書が総括されつつある。また、昨年に続いて建設大臣・知事指定の建築士指定講習会で住宅編を担当する。

福 本 和 正 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

3年時前期必修科目の「構造材料実験」に主として使用するため、「初動設備」として新規に導入したり、改良を加えたパソコン制御の万能試験機や加振機の操作の習練に、相当の時間を費やした。これらの機器を使う「落橋防止装置」の公開実験を、県内の企業から依頼され、その準備と打ち合わせにも莫大な時間を取られたが、公開実験は盛況であった。

木造家屋に多い土壁の耐震性を根本的に見直そうと、京大防災研究所の鈴木先生を中心とする共同研究が1997年度から始まり、壁土のせん断強度の解明を担当している。

また「常時微動による湖東平野の地震基盤の探索」という主旨の特別研究が採択されたので、微動計測の熟練者の応援を得て、11月末深夜に本学周辺で実測した。貴重なデータが得られたので、学会等でも発表する予定である。

研究ゼミとして、数年来参加している京大建築学教室長岡研究室での研究は、大詰めに近づき、まとめを急いでいる。

滋賀県の「建築物耐震判定委員会」は、「1995年兵庫県南部地震」の1000日後に、滋賀県事務所協会を事務局、委員長を藤原先生として発足し、副委員長を私が務めている。既に2回の委員会で、約20件の判定を行っている。

石田潤一郎 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

昨年、執筆・発表した論考は、「建築のもう一つの評価軸」(『建築と社会』1月号)、「<関西建築界>の成立」(『建築と社会』4月号)、「歴史資源を活かした街づくり」(『商店建築』5月号)、『京都の赤レンガ』(京都新聞社、共著)、『建築学がわかる。』(朝日新聞社、共著)、『建築MAP京都』(TOTO出版、共編著、98年1月刊)、『近代建築史』(昭和堂、共編著、98年3月刊)などがあります。このほか、文化財建造物の調査活動では[京都府庁舎日本館][京都府立図書館][琵琶湖ホテル]を調べました。また、上記[京都府立図書館]と[旧彦根高商外国人教師官舎]の保存運動のお手伝いもしましたが、前者は奏功しませんでした。

こここのところ、通史や概説の執筆が多く、それはそれなりの面白さがあるにしても、一種の不全感がつのっています。一つはモノグラフの堅固な手ごたえに対する飢えであり、もう一つは未知の領域への憧れといってよいでしょう。98年は昔からの宿題に答えを出しながら、研究の地平線を広げることに努めたいと考えています。

三谷徹 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

対外活動：高校生からまちづくり、設計のプロ集団に至るまで様々な人との対話。

中国山東省建築工程学院講演、東京大学工学部建築学科講演、建築学会関東支部「環境セミナー」講演、建築士会川崎支部講演、石巻市田代島まちづくり委員会副座長、滋賀県八日市南高校講演、など

研究活動：中津市「風の丘」竣工、名取市文化会館環境整備竣工、、品川東口再開発地区「歩行者大空間」基本計画、群馬県新美術館ランドスケープ基本計画、DesignedLandscapeForum(サンフランシスコ近代美術館)出品、マレーシア・クアラルンプル在外研修、など。

杉元葉子 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

昨年一番の収穫は、ドイツで<ミュンスター彫刻プロジェクト>を観たことである。これは今回で3回目を迎える現代パブリックアートの祭典であり、アーティストが街に滞在しそこに特定の場所を選んで、その場所に呼応した作品を創る方式を特徴とする。作品は原則として夏の間だけの仮設であり、造営や運営には市民ボランティアも参加する。現在の都市が様々な問題を抱え、新しい計画手法が摸索される中で、人間の存在の本質に関わる諸側面であっても合理的な把握がむずかしいものはしばしば歪小化されたり欠落したりする。こうした状況に都市空間と人間の関わりの面で鋭く有効なアプローチをしたのがミュンスターであり、アートの企画でありながらほとんど都市計画といえる側面をもつ。老若男女が自転車で街を

めぐりながら素直に楽しんでいる様子は環境形成の手法への貴重なヒントであり、これを今後具体的な企画につなげたいと夢を膨らませている。

伊丹清 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

日本建築学会計画系論文集「断熱玄関ドアの熱貫流率の計算法」の原稿作成(12月号掲載)、社)リビングアメニティ協会「窓の熱貫流率算出方法に関する研究報告書 その2」の担当部分の原稿執筆、引き続き「その3」のための委員を継続。夏前から後期授業開始までの間、新しく開講する実験のための種々の機器の環境工学実験室への搬入、調整、それに講習、加えてその部屋の整理に追われる。後期からは財)滋賀県大学等学術文化振興財団の特別奨励研究「スチールハウスの断熱性、防露対策に関する研究」をスタートさせる。現在Mac上で使用する熱橋解析のプログラムの汎用性を高めるためWindows95下のアプリケーションへの移植を計画。そしてそのためのWin95下でのプログラミング環境の整備を行う。

迫田正美 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

現在の関心事は環境に関するイメージが街づくりや建築のあり方にどのように関係するかということである。最近はこの環境イメージという概念をどのように規定するべきかを考えてきていたが、今年は「モンゴル遊牧社会の変容と将来像」(文部省科学研究費、国際学術研究)に参加し、ウランバートル市の都市計画の発展を現地で調査することができたことは貴重な体験となった。

轟慎一 / 環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

「地域における環境連関構造に関する研究」として、「千葉県佐原市新島」(水郷地域)を対象に、調査分析に取り組んでいます。

また琵琶湖研究所のプロジェクト「琵琶湖周辺の土地利用・沿岸域管理の研究」のため秋山(経済地理)横山(景観生態学)木村(環境経済)野田(環境社会学)らと、環境政策研究会の立ち上げ。轟は、生活環境史や地域景観論の視点も見据え、集落空間の環境連関構造の調査分析にかかります。事例地は、環境FW とかぶる「守山赤野井湾~草津」と「湖北町尾上~びわ町早崎」。

研究室では「まちづくりゼミ」がスタート。社会計画/環境デザイン/環境生態の各専攻の学生がまざって、週1ペースで自主ゼミ。テーマは、都市計画・農村計画・まちづくり・地域学など。

重永昌二 / 生物資源管理学科

1. 地域集会での講演

県民と行政を結ぶパイプ役「くらしのモニター」研修会(滋賀県企画県民部県民生活課主催)で講演。

演題:「食品の安全性について 遺伝子組み換え食品とは」(6月23日 県庁)

伊吹町教育委員会懇談会で講演。演題:「環境問題について 認識と対応」(9月3日 伊吹町薬草の

里文化センター)

坂田郡教育研究会で講演。演題：「環境教育を考える」(2月26日 伊吹町ジョイホール)

2. タイ国研究者の来訪

モンクット王工科大学農業工学部長 Arom Sripichitt 氏およびカセサート大学農学部準教授 Prapa Sripichitt 氏 (10月17~18日)

カセサート大学中央研究所研究員 Chuanpis Aroonrungsikul 氏 (10月22日)

久馬 一 剛 / 生物資源管理学科

何といってもハイライトは一ヶ月に及ぶモンゴル調査であった。今まで海外の調査に何十回も出かけたことがあるが、木のないステップ草原の国は初めてであり、極めて刺激的な経験であった。今回の調査では、人間文化学部の西川先生と小貫先生によるモンゴル遊牧社会研究の一部として、草原の牧羊力にかかわる土地・土壌要因をみることを目的とした。もちろん短期間の調査で、事前の予備知識もないところから、多くを望むことは無理であったが、調査の中で幾らかの土地勘を得たことと、モンゴルの自然環境や土壌に関する若干の有用な資料を得たことから、少しはモンゴルの土壌についてまとめをしたり、牧羊力について考える手掛かりが得られたと思っている。それにしても、今回のモンゴル調査で、昔勉強したロシア語が久しぶりに役立ったのは嬉しかった。それと、山羊の群れに一日ついて歩くだけの体力があるのを確認したのも収穫だった。

吉 田 十 一 / 生物資源管理学科

平成9年度に開講した「資源流通管理学II」は、環境科学部学生により広い国際的視野を持たせることを目指している。食糧資源を中心として展開される人間と環境との社会・経済的なかわり方を鳥瞰する。現実を見失わないよう、ヨーロッパ、アジア、アメリカ等諸外国の見聞も続けている。

3回生の環境フィールドワークでは、安全な食品の生産・流通・消費の成立条件を究明中である。

中 嶋 隆 / 生物資源管理学科

研究テーマ；畜産環境改善に関する動物栄養学からのアプローチ

1997年度の論文、研究発表

[論文(共著)] 大豆粕の発酵処理によるミネラル利用性の向上、栄養生理研究会報、41 : 51-68.1997.

Fermentation of soybean meal with *Aspergillus usarii* reduces phosphorus excretion in chicks. Poultry Science. 印刷中。

[研究発表(共著)] 飼料への酵母由来フィターゼ添加が子ブタのリン利用性に及ぼす影響。第92回日本畜産学会講演。 飼料への酵母フィターゼ添加が子ブタのリン利用性に及ぼす影響。第94回日本畜産学会講演。

矢 部 勝 彦 / 生物資源管理学科

現在、取り組んでいる課題は「研究を通じた教育はどのようにすれば達成されるのか」である。自分は環境問題に関わりのある研究に従事しており、これを教育に反映させようと努力しているつもりであるが、できていないジレンマに悩まされているここ数年と言えよう。これは自分の哲学なるものが希薄だから、そう感じざるを得ないのではなからうか？ このような堂々巡りに明け暮れたこの1年だった。

まず、研究では、「持続可能な植生の環境創出」、「地域に応じた水資源開発可能量の推定・確保」、「低コスト、省労力、かつ単純な灌漑システムの開発」、「環境と調和した土壌・水管理システムの構築」という課題に取り組んできた。そして、整理できた結果のいくつかを論文原稿などに纏めたが、大半は追加データの収集を要する今後への宿題として残された。

つぎに、教育では、とくに講義は専門基礎を述べて、所々に研究体験を取入れるに留まっている。野外実習に相当する環境フィールドワーク()は、現地見学前に予備知識として環境実態の観察の重要性を述べ、現地で実態の認識を高めてもらった。また、()は、設定された課題に対して「どのように考えて取り組むか」という考える力を養うことを基本的な姿勢とした。そのため、目的を達成するにはどうすればよいか、どのような項目や方法などが必要かを考えてもらい、学生の自主的判断に任せて取り組んでもらった。すなわち、いずれも結果よりも思考プロセスを重視するように努めた。したがって、()では得られた結果について、それで十分なのか不十分なのかはレポートにコメントし、()では学生自身に考えてもらった。このような教育の善し悪しは、今後における学生の反応待ちと考えている。

以上、この1年を研究と教育の両面からふりかえってみたが、何か物足りないものを感じる。それは、「大学及び大学の教員は如何にあるべきであろうか」を考えさせていないからだと思う。しかし、この課題についてはいつの日か、誌面を借りて独断と偏見を交えて話をさせて戴きたいと思う。

西 尾 敏 彦 / 生物資源管理学科

この一年は、おもに二つの課題を中心に研究を行ってきました。いずれも長期の取り組みが必要な課題で、継続研究として取り組んでいます。

トマト果実の生理障害のひとつである「しり腐れ果」は主要因であるカルシウム欠乏以外に、トマトの成長をとりまく環境条件が発生にかかわっています。トマトのしり腐れ果発生に関する研究はトマトのみならず広く野菜や花卉の栽培と環境とのかかわりに関する研究でもあるので、今後も続けていく予定です。

野菜は多肥栽培が行われる場合が多く、野菜の施肥による環境汚染が問題になることがあります。近年、環境にやさしい施肥法が、強く求められています。そこで、環境にやさしいと同時に安定した生産が得られる施肥法を確立するための基礎的な研究を始めています。

園芸学会平成9年度秋季大会出席(共同研究発表)平成9年度園芸学会近畿支部大会出席(共同研究発表)

長谷川 博 / 生物資源管理学科

大学はやはり研究活動が軌道に乗らなければ大学ではない。ここ数年来、私が育成したイネの硝酸代謝

関連突然変異体を他研究機関の共同研究者に預けて研究を進め、いくつかの興味ある成果も得られている (Breeding Science 47、国際植物分子生物学会に発表) が、自分の実験室から生まれた結果でないことに不満が残る。本年度は研究室体制をつくる予備年として、ボランティア的な3回生に支えられてやってきた。長谷川・竹村「NO2/NO3アッセイキットを用いたイネの硝酸代謝能の評価」(近畿作物・育種研究会、12月)が彦根産データによる第一声でした。

金 木 亮 一 / 生物資源管理学科

【著書・論文】 人と自然にやさしい地域マネジメント、農業土木学会、p65-96 地域環境と灌漑排水、畑地農業振興会、p86-97、p223-227 水田負荷の削減方法、Land Use Community No.13、p3-23 物質循環管理システムのあり方、農土誌66、p13-18

【講義・実験実習】 水質管理学 生物資源管理学実験 環境FW 環境FW

【各種委員】 農業土木学会論文集編集委員 農業土木学会農村計画研究部会幹事 農業土木学会地域環境管理工学編集委員 農業土木学会FORE2050物質循環系部会専門委員 「豊穡の郷・碧い琵琶湖創造作戦」行政連絡会議委員 水質保全対策事業(浮舟地区)検討委員 自然環境保全事業(海津地区)技術検討委員

沢 田 裕 一 / 生物資源管理学科

【論文】 Population stability in relation to resource availability in an introduced population of an herbivorous lady beetle. Res. Popul. Ecol. 39(1): 37-45. A shift toward early reproduction in introduced herbivorous ladybird. Ecol. Entomol. 22(1): 90-96. 【授業】 動物生態学、害虫管理学、生物資源管理学実験 III、外書講義 I、環境フィールドワークII、III、作物保護学(滋賀大) 【トピックス】 北アルプス立山での高山植物調査(自然環境特別実習、8月) 彦根東高校での特別講義「動物生態学とその応用研究」(10月) 淡海生涯カレッジ講師「虫の世界から見る地域環境」(10月) アジア太平洋圏昆虫学会議シンポジウム「アジアにおける総合的害虫管理(IPM)の展開」での招待講演(台湾、台中市、11月)

上 田 邦 夫 / 生物資源管理学科

この一年は短大よりの移転で搬入した実験器具・機器の整理と、新しく購入した整備備品の据えつけに多くの時間を費やした。新規購入の主なものはDNA Sequencer, Protein Sequencer、HPLC、超遠心機などである。

学会関係では XIII International Plant Nutrition Colloquium に参加して、多くの収穫を得た。植物栄養学の最近の世界的なレベルでの変貌と動向を知ることができた。

小 谷 廣 通 / 生物資源管理学科

[著書、発表](1)「地域環境と灌漑排水、(編著：丸山)」の『.2.蒸発散と地域環境』の部分で共同執筆し、また、『.2.2.2 微気象学的方法による植被からの物質輸送の推定』の部分で執筆した。(2)平成9年度農業土木学会大会講演会において、「植被上の温度分布における地面修正量について」というテーマで発表した。(3)鳥取大学乾燥地研究センター共同研究発表会において、「微気象学的方法による水蒸気フラックスの測定について」というテーマで共同発表した。[講義](1)環境フィールドワーク、(2)環境フィールドワーク、(3)生物資源管理学実験、(4)物理学実験、(5)水資源利用学、(6)専門外書講義。

上 町 達 也 / 生物資源管理学科

これまでアジサイの装飾花の発生について研究を行ってきた。本年は主に芽条変異枝を用いて、花序の発達パターンの変化と装飾花の発生との関係について検討を行った(園芸学会平成9年度秋季大会にて発表)。またアジサイの花芽に抗オーキシン剤であるTIBAを処理することにより、アジサイの装飾花のがく片が合着し、筒状の花が発生することを明らかにした(平成9年度園芸学会近畿支部和歌山大会にて発表)。

上町達也・西尾敏彦：アジサイにおける装飾花の発生に関する研究(第3報)装飾花の着生パターンの検討。園学雑。66(別2):522-523.1997。